

12～14世紀のビザンティン聖堂におけるキリスト伝サイクルの変容

—— マケドニア、ヴァロシュとマナスティルのスヴェティ・ニコラ聖堂を中心に

菅原裕文（早稲田大学）

ビザンティン聖堂の装飾プログラムは、後期ビザンティン（13～15世紀）において複雑化・多層化の傾向を見せ、饒舌なまでにキリストの生涯を詳述しようとするプログラムへと変貌を遂げた。本発表の目的は中期（9～12世紀）から後期への過渡期にあたる13世紀後半の2聖堂——マケドニア、マナスティルのスヴェティ・ニコラ聖堂（1271年）とヴァロシュのスヴェティ・ニコラ聖堂（1298年）を中心に、中期から後期に至るキリスト伝変容の実態を明らかにし、その要因を考察することにある。

9世紀末から10世紀初頭のカップドキアで見られるように、聖堂装飾プログラムは壁面をフリーズ状に分節し、絵巻物を拵げてキリストの生涯を詳述する連続説話サイクルが主流だった。11世紀以降、典礼暦の整備、儀式の執行方式の変化、ギリシア十字式建築の導入による内部空間の複雑化に伴い、図像のサイクルもキリストの生涯から主要な12場面を抽出し、これらを核に構成された十二大祭サイクルへと変化する。

本発表の主題となる二つのスヴェティ・ニコラ聖堂に先行するクルビノヴォのスヴェティ・ギョルギ聖堂では、単廊式の聖堂ながらも、典型的な十二大祭サイクルを採るのに対し、マナスティルでは十二大祭サイクルに「キリストの昇架」という新たに創出された図像が挿入されている。他方、ヴァロシュではプログラム上でマナスティル以上の複雑化・多層化の進展が見られる。南北壁面はフリーズ状に2段に分節され、「ピラトによる尋問」、「キリストへの嘲弄」、「ゴルゴタへの道行き」、「昇架」、「ゲッセマネの祈り」といった受難伝図像が新たに挿入されている。

中期から後期に至る過渡期の2聖堂では、受難伝に新たな図像が加えられて、とりわけヴァロシュの作例ではクルビノヴォのプログラムを踏襲したマナスティルの作例以上に増補がなされている。27年の間に何ゆえこうした現象が起こりえたのか、現時点では推測の域を出ないが、結論に代えて二つの可能性を提示したい。

1) 典礼の実践を通じて解釈力を培った後期ビザンティンの人々が、中期のシンプルな十二大祭サイクルでは不可能だった典礼儀式の意義や象徴性、典礼で歌われる讚美歌——キリストの受難に関連する——に至るまで視覚化しようとした可能性がある。これについては、中期から後期に至る修道規則や典礼註解の比較検討が必要となる。

2) 2つのスヴェティ・ニコラ聖堂からほど近いオフリドでは、ヴァロシュの作例の直前、1294/95年に複雑なプログラムを持つボゴロディツァ・ペリブレプタ聖堂が献堂された。同聖堂は軍司令官プロゴノス・スグロスと妻エウドキアが二人組の画家ミハイルとエウティキオスに依頼した作例だが、以後、彼らはセルビア王ステファン・ウロシュ2世ミルティンの御用画家となった。このことから察するに、同聖堂は近隣で評判を呼んだに相違なく、ヴァロシュの画家たちの創造性を促したという可能性も考えられる。